

講演二

東アジア史からみた鞠智城

講演者紹介

石井 正敏 (いしい まさとし)

法政大学文学部史学科卒業。中央大学大学院文学研究科国史学専攻博士課程単位取得。東京大学史料編纂所助手・助教授を経て、中央大学文学部助教授を歴任。現在、中央大学文学部教授、中央大学人文科学研究所長、中央史学会会長。
専門は日本古代史。博士（歴史学）。

・講演二 「東アジア史からみた鞠智城」

石 井 正 敏（中央大学教授）

一、山城と鞠智城への関心

只今ご紹介いただきました中央大学の石井でございます。どうぞよろしくお願いします。私は、対外関係史を専攻しており、外交だとか貿易をはじめとした交流史を勉強しております。そこで早くから白村江前後の日本、あるいはその後の朝鮮半島新羅との交流、遣唐使の問題、いろんなことを学んでまいりました。当然こうした鞠智城をはじめとする山城の築造、その背景、あるいはその後の維持・管理、そして最後はどうなったのだろうということに関心を持っております。そうした中で、例えば鬼ノ城であるとか対馬の金田城にも一度行く機会がございました。それから大野城であるとか、そういうところを幾つか廻ったことがあります。ところが鞠智城については知識としては知っておりましたが、一度も訪ねたことがありませんでした。シンポジウムにご出席の皆さんはおそらく一度はご覧になっていないかと思われ、その肝心の話す側が知らないではどうしようも無いだろうということで、一夜漬けですが、昨日矢野裕介さんにご案内していただき、隅々まで見学することができました。それまで見ないと何となく不安だったんですが、見て随分と安心もいたしました。それと同時に今まで知っている山城とは随分違うなということも実感いたし

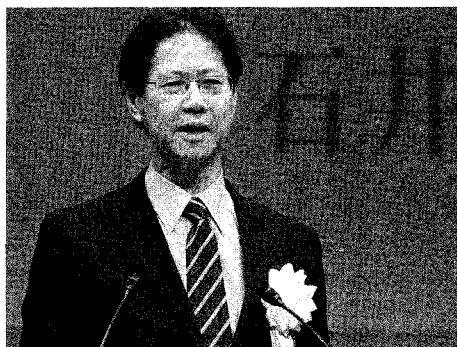


写真 12 石井正敏氏

ました。あれだけ平坦な場所、報告書等にはすでにそういうことも書いてあるのですけれども、実際にその状況を目の当たりにして、これは通常の山城ではないなという感じをしまして、ますますこの鞠智城というものに興味が持たれました。そこで本日私に与えられました課題は東アジア史からみた鞠智城ということで、これまで私が勉強を進めてまいりました東アジアという視点からこの鞠智城というものを位置づけるという意味合いを持つているだろうか、そんなことについて少しお話できればと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

それでは本日お配りしたレジメ集の内容に則してお話を進めていきたいと思います。年表(資料篇五二頁)も参考にしながらお聴きいただければと思います。だいたいこうした歴史事象について考えるとき、私はまず年表を作ります。年表を作つて時系列、だいたい時代順にどういふことが起こっているのか、その中に出来事を配置していく。そうすると随分と状況が見えてくると、そういうことがあるものですから、この講演のお話を伺ったときにもまずこの時代の年表、特に山城を中心とした年表を作つてみよう、また肥後地域の歴史的な様々な問題を踏まえながら考えてみるとどんな年表ができるだろうか。そんなことを考えてまずは年表を作ってみました。そしてもう一つ、これは先ほど来何度か話題にして取り上げられていますが、今年三月、これまで発掘を長く続けてこられた教育委員会の方々を中心にして報告書が刊行されました。それはとても分厚いものです。写真もたっぷり入っていて重いものですけれども、内容

的にも重厚なもので、それで私実際には見たこともない鞠智城に、もう何度も行ったような気持ちになって読み返すことができました。建物であるとか瓦であるとか、あるいは菩薩像、そういった素晴らしい品々が発掘されている。しかしながらその一方では、私は文献史料つまり主に文字に基づいた研究を進めておりますが、文字史料とかなり限られております。そこでこうした考古学の発掘調査の成果というものをいかにして文献資料と結びつけて考えていくか、そのあたりを課題として研究を進め、そして本日、私なりの勉強の成果の一端を皆さんの前で話をさせていただきたいと思っております。

二、発掘調査の成果と九世紀の鞠智城

東アジア史から見たという時にはどうしても、こうした山城がいつ出来たのかに関心があり、先ほどの小田先生のお話にもありましたように、白村江の戦いで敗れた後、今度はいよいよ唐と新羅の連合軍が日本に向かってくるだろうという状況の中で建てられたということはおおそ共通の認識になっていると思います。私もさきほど小田先生がホワイトボードに書かれました、朝鮮半島に置かれた唐の出先機関から派遣された使者である郭務儆がたくさんの百濟人、二千人ともいわれる人たちを連れて来ている。多数の百濟からの亡命者が日本に渡って来た。そのあたりのところから少しお話をしようかというふうに考えておりました。ところがこの報告書を読んでおりましたところ、私のレジュメの冒頭に紹介したような記事が目に入りましたね。それを少し読み上げてみますと、「はじめに」(資料篇一九頁)のところですね、長者原地区の一部で確認された建物群の層位的な検出例から掘立柱建物が二基、それから礎石立ちの建物も二基ある。その中で最も新しい礎石建物跡は九世紀末に建てられた、とこういう一節を見出したのですね。だいた

い山城というのは非常、緊急事態に備えるためということであまり長い期間使われているものではないということが私のイメージにありましたから、九世紀末にもまた新しい建物が建てられているというこの記述に非常に驚きました。九世紀といえますと、新羅の海賊が博多を襲ったり、あるいは肥後国を襲ったりする出来事がある。また一方では貿易が盛んになって、朝鮮半島の南海岸、その特に西の部分には島々が点在している、多島海と呼ばれるような地域がありますが、そこを拠点としている人たちが時には海賊となり、時には貿易商人となるというような形で日本に盛んにやって来ている。そういうことは以前から知ってはおりました。そうするとそういう時期に、まさに重なるような時期にこの鞠智城に建物が新たに、それも礎石立ちの建物が建てられているということで、この時期の国際的な環境というものはどういうものだったのだろうか、そんなところを少し中心にして今回お話をしてみたいと思うようになりました。元來の関心というものは築城の最初の頃、朝鮮半島の動乱というものを軸にして東アジア全体が混乱した時期に設けられた重要な遺跡としての鞠智城をどう位置づけるかということに あったわけですが、もう一つの私の関心である九世紀、一〇世紀、そうした国際的な広く多様な交流の中にこの鞠智城を位置づけることができるか、という意味合いを持たせることができるだろうか、と思うようになった次第です。

三、二つのテーマー貞観十一年の新羅海賊と貞観十五年の渤海使天草漂着ー

そこで本日は、大きく二つのテーマを用意いたしました。まず一つ目が八六九年（貞観十一）、新羅の海賊が博多湾に侵入してそこに泊まっていた豊前国ー今日の大分県ーの年貢を運ぶ船を襲い、積んでいた絹綿を奪って逃げて行った。大宰府は海賊を追跡させたのですが結局逃がしてしまった、という出来事が起こっ

ています。九州の綿、特に筑紫の綿というのは非常に良質なものとよく知られています。そうした絹綿というのは新羅ではほとんど産出しませんので彼らにとつては貴重な品だったわけですね。それを奪って逃げたと。それを追わせたけれども結局は逃がしてしまったということに大きな衝撃を朝廷は受けるのですね。その波紋といったものがこうした大宰府を中心とした防衛ネットワークにも影響を与えているのではないだろうか。先ほどの小田先生のお話、あるいは矢野さんの話にもありましたように鞠智城というのが九州、大宰府を中心としたネットワークの南の重要拠点であることを考えると、この貞観十一年の新羅の海賊の出現というものも何らかの形で鞠智城の経営に影響を与えているのではないか、そんなことを少し考えてみたということですね。

それからもう一つは、八七三年（貞観十五）、渤海の使者が薩摩・肥後に漂着したということです。渤海というのは今日の中国の朝鮮半島北部・東北三省からロシアの沿海州にかけて七世紀の末から一〇世紀のはじめまで存続して、日本とは七二七年から二〇〇年間も友好的な交流を持った国です。この渤海との交流は原則としては、今日のロシアと中国・北朝鮮との国境地域にあった港と、能登半島を中心とした地域との間を船が往来して交流を続けるという形なわけですが、そうした渤海の使いが薩摩・肥後に到着しました。ただし今回の渤海使というのは日本を目的とした使節ではなくて実は唐に向けて派遣された使者、いわば渤海の遣唐使ですね。渤海の遣唐使が二隻で唐に向かう途中で風に流され、薩摩の甌島に着きます。そこで最初に日本の役所から尋問を受けるのですが、二隻のうち一隻はその後逃げてしまつて、今度は肥後天草に漂着するのですね。そういった経過を辿る渤海の使節がやって来るのですが、この時の渤海の使いが何のため

に派遣されたかといえ、唐で九世紀の末に起こっていた内乱、これを唐が平定したということ、お祝い

のために渤海の王様が送った使者だったのです。ですから日本とは全く関係が無い出来事であり、使いでもあるのですが、その使いがたまたま日本に漂着したことで、その唐の情報を日本もキャッチすることになります。その情報を知った日本は、果たして対岸の火事と見ていただろうか、それ以前、同じように唐の情報が伝わった時にはどう対応をしたのか、そういう問題を参考にしながら考えてみたい。今回はこうした二つの問題点、いわば九世紀から一〇世紀にかけての対外関係における鞠智城、そんなテーマで少しお話をしてみたいと思います。

四、貞観十一年（八六九）の新羅海賊と鞠智城

それではまず最初のテーマですね、貞観十一年の新羅海賊と大宰府防衛網の強化と鞠智城ということでお話を進めてまいります。ここで大宰府防衛網という言葉を使っておりますけれども、これには二つの意味を込めています。一つは大宰府を天守閣にみなせば、その周辺、例えば大野城、基肄城、南側の鞠智城、こういった城が櫓であるとか二の丸、三の丸、そういった形でまずは大宰府を防衛するためのネットワークという意味。それともう一つは大宰府を中心として周辺に配置した幾つかの支城という位置づけですね。そうした支城でもってともかく唐や新羅、朝鮮半島や中国からの軍事的な脅威から守る。そうした二つの意味で大宰府防衛網という表現をここでは私は使っておりますけれども、そうした意味で南の押さえとしてこの鞠智城、非常に重要な意味を持つていることは改めて言うまでもありません。そこでそれでは二つの事例からこの鞠智城の位置づけを行うとどういことが言えるのだろうか、そんなことについてこれからお話を進めてまいります。

それでは貞観十一年の出来事というのはどういふことだったのかといふことですが、そのことについても私の文章でまとめておきました。つまりここで私が述べたいところは、先ほど来のお話で、いわゆる朝鮮式山城というものが白村江の戦後のその緊急体制、唐や新羅がいつ今度は自分たちのもとに押し寄せてくるかわからない、そのために造られたという、外敵防衛という視点から見た時、そうした対外的な脅威というものは、その後も決して減ることはないだろうといふことです。

新羅との関係は七世紀、八世紀を通じて大きく変化していきます。白村江の戦いの後、唐と新羅は共同して百濟について高句麗を滅ぼすわけですが、新羅は百濟・高句麗を滅ぼせば自分は朝鮮半島全域を統治できるだろう、こう目論んでいたところ、そうではなくて唐が出先に機関を置いて間接統治を目指す。そこで新羅の思惑と唐の思惑とが大きく違ってくる。昨日の友はそこに今日の敵となってしまうわけですね。そうすると白村江で直接戦火を交えた日本であっても新羅はまずは背後をしっかり押さえておかなければいけないといふことで、日本との交流を復活させ、友好的な形で進めようといひます。そこで日本側も新羅の方針に応じて交流を再開いたします。そういうことで最初は唐という共通のいわば敵といひますか、非常に大きな勢力を相手に新羅と日本は同盟を結びます。ところが新羅はやがて唐との敵対関係を緩和して、平和友好的な交流へと転換していきます。そうなると日本に対する態度、当然変わってきますね。一方の日本側としては今まであれだけ低姿勢で日本に交流してきたのに段々低姿勢を失って対等へと交流の姿勢を変えていこうとするのは無礼ではないかといふことで、八世紀に入ると日本と新羅両者の間で紛糾が生じてまいります。そういう形で新羅との関係が悪化して最終的には七十九年を最後として新羅とのいわゆる外交交渉は終わりを告げるようになります。こうした流れの中で考えていくと、新羅関係の悪化といふことは新羅が脅威

へと転換することを意味します。そういった意味では白村江の敗戦後の状況と少しも変わらない。対外的な脅威というものは常に存在しているわけです。そういうことからみれば、確かに鞠智城は建物などいろいろな変遷はありますが、その役割の重要な一つとしてこの対外的な防衛、大宰府ネットワークの一角として重要な意味を持つという点においては、ずっと変わりはないだろうと思っております。そうした事例をよく示しているのがこの貞観十一年の新羅海賊ということになりますね。

これにつきましては資料篇の一（一）「新羅海賊の出現とその衝撃」（四三頁）、衝撃というのは朝廷が大きな衝撃を受けたという意味ですね。その関連する史料を一、二、三にあげておきましたが、その内容は先ほどお話したとおりです。つまり博多湾内に停泊していた豊前国の年貢船、これを二隻の新羅海賊が襲って積載していた絹綿を奪って逃走した。これを大宰府の兵士に追わせたのだけでも、結局取り逃がしてしまったということですね。朝廷はこれに非常に大きな衝撃を受けるわけです。早速、大宰府の役人を譴責するのですね、叱り飛ばすのです。何たる失態だということですね。この【史料二】（四四頁）では上から四行目のところ、「唯に官物を亡失するのみに非ず、兼ねて亦た国威を損辱す。之を往古に求むるに、未だ前聞有らず。後來に貽^{のこ}すに、當に面目無かるべし。」とあります。非常に恥であるとするし、面目ないと、こういう状況にした大宰府、いったい何をしているのだという形で叱責するわけですね。そして唯叱責するだけではないのです。ここが大事なところですが、ここで軍備の強化をはかるんですね。

ただその前にもう一つ衝撃を受けたできごとがこの年にありました。【史料三】（四四頁）になります。この貞観十一年、新羅の海賊事件が起こったのは五月ですが、実は同じ頃、貞観地震と呼ばれる大地震と大津波が陸奥国で起こっています。マグニチュードおそらく八・四以上だろうということです。昨年の三・

一とほぼ同規模になります。そしてその津波であるとか地震によって多賀城が壊滅したという記録がこの『日本三代実録』の中に残っています。さらにその年の七月に同じく肥後国でも地震・風水の災害が起こっているんですね。年号をとって貞観地震と呼ばれて、もっぱら陸奥国の場合が有名ですが、実は肥後国でも起こっているのです。これも昨年、本日ご来場の方におそらく菊池市にお住まいの方いらっしゃるかもしれません、まさに鞠智城のある菊池市では一〇月でしたかね、大きな地震、震度五強の地震があったというように私記憶しておりますけれども。貞観十一年（八六九）にも陸奥、そして肥後で地震が起こり、同じように昨年も三月とそれから一〇月に起きています。何か歴史的に符合するようなそんな感じがいたしておりますが、そうした大地震もあり、また、一方新羅の海賊事件も起こるということで、この貞観十一年は外寇と天災が続きます。また、そこに大宰府から、大きな鳥が集まってガアガア騒いでいるという異変の報告が届きます。こうした異変があると、朝廷では必ず占いにかけます。占った結果、これは隣国つまり新羅から兵が攻めてくる、そういう兆しじゃないかと、そんな結果が出たんですね。ですから朝廷としては国内外いろいろな出来事でもって右往左往します。しかしながら出来ることといえば寺社に祈ることです。そこで年末には伊勢大神宮とそれから石清水八幡宮、翌年にも九州の宗像、そういったところに使者を派遣してお祈りをしております。それらはほぼ同文なものですから一通を挙げましたのが【史料三】（四四頁）になります。これは伊勢大神宮に使者を派遣して、その神宮の神前でもって天皇の言葉を読み上げるのですね。これを告げる文と書いてこうもんと読みます。その告文をここに記しておきましたけど、これは長文にわたりますので要点のみ申し上げますと、まず線を引いてあるところですね。「我が朝」我が国です、^{みかど}「我が朝」我が国です、「久しく軍旅」つまり長いこと戦いが無く、「専ら警護を忘れたり」、警戒を忘れていた。だからこういう海賊の侵入を易々と

招く結果になったのだということですね。対外的な防衛というもの、まあ平和な時に危機を考えるとというのが元来国家がとるべき道ですけれども、こうした時、つい、平和におぼれてしまう。そういうことが今回のような結果を招いたのだということ、こういつたことをまず述べています。そして一方重要な部分は、我が国は神の国であると。神明の国であるということが続けて書いてありますね。「然れども我が日本の朝は、所謂神明之国なり」^{かみのくに}。神が作り神が守っている国だと。だから伊勢大神宮にお参りして、その神の加護によつて、もし隣国新羅が日本を攻めようなどと企てたならばこれは神の力によつてぜひ防いで欲しい。こういうことを神前で読み上げるといふ内容になっております。

五、大宰府防衛ネットワークの強化と鞠智城

そこでただ神に頼むだけでなく、防衛網の強化を図るのです。どういう強化を図るかというところ、これも【史料四（六）】（四五頁）にあげておきました。これまで諸国に軍団兵士というものがありません。肥後国の場合には益城の軍団の存在が知られておりますが、おそらく鞠智にも軍団が置かれていただろうと思えますけれども、そうした軍団制における兵士の質が落ちてきて、実際の防衛の役には立たないということで、天長三年（八二六）以来、何度か再編が企てられています。五二頁のところに表としてまとめておきましたのでこちらをご覧ください。天長三年の段階、貞観十一年より以前ですね、まだ海賊が出現する以前ですけれども、その辺りから軍備の再編が行われています。この時に軍団制の兵士に変わって選士という制度を創設してこれを九州各国、大宰府を中心として九州各国に配備いたします。当然肥後国にも配備されました。ただ、人数の内訳というのは明確にはわかりません。大宰府には四〇〇人ということがわかつてはいます。それは

だいたい一〇〇人前後を部隊としてそれが四番、四グループでもって交代に勤務をする、こういう体制を作りあげました。これが八二六年の段階ですね。ところがこうしたせつかく選士制という軍備を整えたのです、それから四〇年後に起こったこの貞観十一年の海賊事件に際しては、選士をきちんと配備しておいたにも関わらず大宰府は海賊を取り逃がしてしまったということで、ここで更に防備の強化が図られます。皆さんは鴻臚館という名前はご存知だと思います。古代の迎賓館ですね。かつての平和台球場の外野席の一角、そこから遺跡が見つかって発掘調査が今日も進められています。今、鴻臚館の跡に行きますと、海からずいぶん離れています。でも実際にはそれは後世の埋め立てによるものであつて八世紀、九世紀頃の鴻臚館というのは海に面した崖の上に建っていました。志賀島からずっと博多湾に入つてくると一番最初に目に入るのが鴻臚館の建物ですね。そこで鴻臚館の海側の部分には石垣もきちんと積んで見栄えもよくしています。ところが反対側はあまりきちんとしていないですね。ともかく新羅や唐の外国の使節が最初に来た時に、ああ凄いい建物だと圧倒しようというようなことでもって鴻臚館は立派な施設といたします。平和外交の象徴ですね。使節がやつて来るとまずそこに滞在させて、そして大宰府との間でやり取りをして都に向かったり、あるいは十分な礼儀を備えていなければそこから帰国させてしまう。そういった形の迎賓館として鴻臚館が使われていました。ところがこの貞観十一年の海賊事件をきっかけにして、この鴻臚館に兵士とそれから武器を配備するようになるのですね。もともと鴻臚館は一番見晴らしのいいところですから当然望楼的な役割、物見櫓的な役割は今までもあつたわけですけども、今度はそこに兵士を常駐させる、それから武器も配備するというのもつて、平和的外交の象徴であつた鴻臚館が今度は防衛の最前線となる。こうした大きな改革が行われております。

このように貞観十一年の海賊侵入をきっかけとして大宰府の防衛網の強化が図られています。こうした状況は海賊が博多湾に侵入した、ということで大宰府側だけだろうとあるいは思われるかもしれませんが、実はこの時の新羅の海賊のルートというものを見てみますと、別の考えも出てくるんですね。年表（五三頁）の八七六年（貞観十八）のところをご覧ください。先ほどの事件から数年後ということになりますが、大宰府から、肥前国松浦郡の庇羅^{ひら}というのは平戸島ですね、それから値嘉^{ちか}とあります。五島列島小値賀島^{おちか}を指すとするなど、などいろんな議論があるのですが、だいたい平戸と五島列島、こうした地域を新たに郡として編成したいという申請があつて、これが認められています（『日本三代実録』貞観十八年三月九日条）。注目したいのは次に続いている文章ですね。唐の商人は平戸であるとか五島、こういった地域にまず立ち寄つて、準備をしてそれから博多に行つて貿易を行う。時にはそこでもつて貿易品を仕入れていく。平戸や五島にあるものを唐物と称して売っている。日本人はまだ目利きができませんでしたからありがたいものとして受取つて買つてしまうのですが、実際にはこうした身近なところで取れたもの、こうしたものを有難がついてたんですね。そうした重要な地点ですが、注目されるのは、貞観十一年の新羅海賊もここを通っていると述べていることです。博多湾を襲つたということで、プサン（釜山）辺りを出た海賊、あるいは半島の南海岸を出た海賊が対馬、杵岐、そして博多へと来たのだらうというルートを思い浮かべますが、この時の史料には対馬や杵岐に寄つたという形跡がありません。ということは海賊侵入のルートとしては朝鮮半島南海岸の東側ではなくて西側、例えばチンド（珍島）、あるいはワンド（莞島）といったところは早くから新羅の貿易商人が根拠地とした場所です。つまりおそらくそうした地域を根拠地とした海賊集団が平戸・五島列島地域を経て博多を襲つたんだらうということですね。そういうルートを考えると、これは博多側だけを防衛す

ればいいだけじゃない。当然平戸・五島列島からさらに肥前・肥後、そういった地域も防衛網の重要な地点になってくるわけです。したがって鴻臚館というところをクローズアップしましたけども、鴻臚館はいわば北側ですね、北側の部分でもってまず最前線を構成する。それと同時にこれまで配備されている肥前であるとか肥後、こういった地域の軍団、当然のことながら鞠智城にも軍備再編の波が押し寄せているのではないかと考えるわけです。九世紀、先ほどの矢野さんの時期区分でいくとだいたいⅣ期、Ⅴ期、Ⅳ期にあたりますが、Ⅳ期になると確かに建物が少なくなるということですので、この私の推測を発掘の成果とどう整合性をとっていくのか、このあたりが一つ論点となり、私自身の課題となります。ただ、そうした九世紀以降も対外関係、特に新羅の脅威というものを考えたときには決して減少はしていないということですね。そうした意味でこの鞠智城の存在や存続の意味について、こうした対外的な側面から、もう一度発掘の成果というものを見直してみたい、こんなふうに考えております。これが第一点のテーマになります。第一点でほぼ時間を尽くしてしまいました。第二のテーマについて急ぎたいと思います。

六、渤海使の肥後天草漂着と鞠智城

第二のテーマは、渤海遣唐使の薩摩・肥後來着と唐情報ということになります。これは八七三年（貞観十五）、八六九年から四、五年後に渤海の遣唐使が天草に漂着したというできごとです。この時、薩摩の甕島、それから天草に着いたわけですけれども、当時の日本ではそうした異国人が来着すると必ず現地の役人が出かけていって事情聴取を行います。一体お前は何人か、どこから来たのか、何のためにやって来たのか。そういうことを尋問してそれを国であるとか大宰府を通して朝廷に報告します。朝廷では報告にもとづいて議

論し、対応を指示すると、こういう流れになるわけですが、この時、最初、現地の役人は新羅人ではないかと疑ったのですね。渤海人と言っているけれども、どうも新羅人が渤海人と偽ってやって来たんじゃないかと。どうも怪しいということで身柄を拘束します。身柄を拘束して大宰府に向かおうとするわけですが、その間に一隻が逃げて、薩摩の甌島から今度は天草の方に着くと、そういう経過を辿ります。ただ、朝廷で審議し、彼らの持ち物をきちんと調べてみると、これは渤海の使いに間違いないということがわかり、渤海の使いなのでから丁重に扱って帰国させなさいと大宰府に指示します。ただ渤海の使であるなら日本との交流が友好的に進んでいるのはよく知っているはずなのに、何でそのあたりをしつかり説明をしないのだということも注意しなさい、そんなことも指示しています。そして万一新羅人だったら直ちに追い返せとも付け加えています。つまり新羅は悪い国、渤海はいい国、こういう固定観念がこの時期、この段階で定着しているのです。先ほどの伊勢神宮への告文でもみられる考えですね。そこにみえる朝鮮観であるとか、神国思想、この二点、これはずっと日本の今日に至るまでと言って過言ではないと思いますが、日本人の根底にある対外意識を定着させる根源が実に貞観十一年の段階にあるのですね。そこでは神功皇后などの話も必ず持ち出されます。神国思想の画期としてはよく蒙古襲来があげられますが、私はこの貞観十一年のできごとを非常に重視しています。そして朝鮮観が定着していることを思わせるのがこの渤海使漂着の記事になると考えています。

七、渤海使が伝えた唐情報

さて、そこで大事なところは、この渤海の遣唐使が何のために派遣されたかということですが、【史料七】（四六頁）に記されています。これによれば、この時唐で徐州の乱が平定されたのでそれをお祝いするため

に渤海から唐に使いを派遣したとあります。つまり渤海は唐の冊封を受けた属国になっていますから臣下としての礼儀を尽くすために唐で起こっていた内乱、これが終息したのでそのお祝いのための使いを派遣した。ところが航路をそれてしまつて日本に着いたという説明をしています。そうすると漂着した渤海使から事情聴取をしていますから、唐の徐州の反乱についても当然日本側でもキャッチしました。徐州は上海のほど近くを通っている大運河で洛陽・長安へと辿つていく途中にある重要な地点です。そこはまた遣唐使が使うルートでもあります。だから徐州という名前はこの当時の日本人にとつて決して無縁の場所ではなかったのです。実際に史料にあげておきましたが八三九年に入唐した有名な円仁という僧侶、『入唐求法巡礼行記』という日記を残しておりますが、その円仁の日記の中に徐州というところを通過したという記事も出てまいります。

ここで一体何が起こつたのかというと、ほうくん龐勛の乱というできごとです。龐勛というのは人名で、龐勛をリーダーとした兵士の反乱です。こうぞう黄巢の乱というのは皆さんご存知だと思いますが、実はその前に唐の朝廷を脅かす内乱が徐州を中心とした地域で起こっていました。非常に大きな反乱で、最初は兵士の反乱であつたのがやがて民衆を巻き込み、さらには在地の豪族も加わつて、民衆反乱へと発展します。これから次に黄巢の乱が起きて、やがて唐が滅亡するわけですが、こうした唐滅亡への直接の引き金となった出来事がこの龐勛の乱ということになります。そしてそれは徐州ですから当然日本の遣唐使のルートにも関わります。こういったことでこの情報を得て日本が非常に驚いたであろうと推測されます。

こうした海外情報で想起されるのは、八世紀の半ばに起きた安祿山の乱情報です。安祿山の乱の情報が渤海を通じて日本に入ってきました。その頃の権力者は藤原仲麻呂、これもご存知ですね、恵美押勝。この恵美

押勝は安祿山反乱の情報を得て何をしたかといえ、決して対岸の火事と見ていないわけです。海を越えた遙か彼方で起こっている出来事とは考えないですね。安祿山の反乱軍は洛陽から長安へ向かおうとしているけれども、おそらく西へは向かえないだろう。矛先を転じて東に向かってくる可能性がある。その行き先は日本かもしれない。だから大宰府の責任者―たまたま吉備真備という非常に著名な学者が責任者を務めていました―吉備真備に命じて、しっかりと防衛方針を固める、こういう指示を出しているのです。外交に関する感覚、非常に鋭いものがあると思います。仲麻呂は中国文化を学んでおり、そうした鋭敏な感覚の持ち主なんですね。仲麻呂というと歴史上あまりよい評判ではないんですが、大変な政治家だと思わせる出来事だろうと思います。そうしますと同じように徐州の乱というものを聞いた時、こうした過去の出来事が当時の人々の脳裏を過ぎつたのではないかと思います。そうしたことで、新たに肥後地域の防衛が必要と考えたのではない、そのように推測しています。

その当時は日本の遣唐使は博多を發つてその後、五島を経由して一気に東シナ海を横断しますが、五島列島からは、天草、有明海に入ったり、あるいは肥後の海にやって来ることが出来ます。こうした地域は逆に言えば、常に対外的な脅威の下にあるといつてよいと思います。一方では平和的な外交もあり、裏腹に脅威というものが存在している、そうしたことを想定してもいいだろうと考えております。【補注】

そして時期的に唐が滅亡してから後になりますけれども、その時期に実際に商人が五島や、長崎県の突端の方に野母崎という場所がありますが、その野母崎近くに唐が滅亡した後の五代十国という時代の商人がやって来たことがあります。野母崎を入れれば肥前、肥後どこにでも行けるわけです。そういった意味では、貿易の商人がやって来るということはいつ海賊が出現するとも限らない。そんな地域になります。この時期に

はまた、年表をご覧いただきたいと思いますが、新羅をめぐる不穏な動きがあり、新羅と肥前、肥後の人たち、この地域の郡司クラスの方が新羅と手を結んで対馬を奪おうというような計画も立てられています。彼らとしては有明海を中心とした貿易ルートを確保するためにそうしたことを企てたのではないかとみられています。いろいろなと不穏な動きも見える、そんな時期でもあるのです。そうした点から見ていけば、渤海遣唐使の天草漂着は、有明海防衛の拠点としての鞠智城の存在意義をあらためて認識させる重要な意味をもっているものと思います。

【補注】この後、仁和元年（八八五）には新羅の使者を称する者が天草にやってきました。しかし正式の使者ではないと疑い、警戒心をあらわにして帰国させています。

八、変わらぬ鞠智城の対外防衛機能

以上、貞観十一年の新羅海賊と同十五年の渤海使天草漂着のできごとを取り上げ、九世紀の鞠智城をめぐる国際的環境について考えてきました。その結果、鞠智城の存在は、対外的な防衛という観点から見たとき八世紀、九世紀、一〇世紀決して変わることはないだろうと思われます。多様な目的あるいは機能というのがこの鞠智城には付与されています。それはあの建物群を見ればわかると私は感じましたけれども、でもその一本の柱としては対外的な意義、これは一貫して変わらなかったのではないかと、こんなことを感じていますね。

少し時間を超過をしてしまいました。もう少しお話をしたかったですけれども、後ほど補足の機会があればお話をしたいと思います。急ぎ足で失礼いたしました。ご清聴ありがとうございました。